

● BCGワクチン

副作用の増加は、接種年齢に関係？

かつて、BCGの接種が定められている年齢は4歳まででした。3、4ヶ月健診のときにあわせて接種されることが多かったのですが、そのときに体調が悪いなどであれば、4歳までに接種すればいいということになっていました。

それが2005年から6ヶ月までの接種になると、副作用が非常に増えました。重篤な骨炎、骨髄炎、全身性のBCG感染症など（図表 i）。それが、6ヶ月までの接種にしたからなのか、ほかの予防接種が非常に増えたことも関係するのかは、よくわかりません。

	1994年10月～2005年3月 [10.5年]	2005年4月～2013年3月 [8年]
接種が定められている年齢	4歳まで	6ヶ月まで
腋窩リンパ節膨脹	488例(46.5例)	453例(56.6例)
接種局所の腫瘍	122例(11.6例)	51例(6.4例)
骨炎・骨髄炎	9例(0.9例)	36例(4.5例)
皮膚結核	15例(3.3例)	181例(22.6例)
全身性播種性BCG感染症	4例(0.4例)	7例(0.9例)
その他の異常反応	168例(16.0例)	65例(8.1例)
基準外報告	54例(5.1例)	64例(8.0例)
		※(例)は年平均

図表 i BCGワクチンの副反応報告数の比較
(「予防接種後副反応報告」より)

2013年以降、いまは1歳までの接種になっていますが、本誌にあるとおり、重篤な副反応報告はさらに増えています（図表 ii）。

	2013年4月～2017年2月〔3.9年〕
接種が定められている年齢	1歳まで
アナフィラキシー	4(1.0例)
全身性播種性BCG感染症	8(2.1例)
BCG骨炎(骨髄炎・骨膜炎)	30(7.7例)
皮膚結核様病変	29(7.4例)
化膿性リンパ節炎	49(12.6例)
	※(例)は年平均

図表 ii 現在の BCG ワクチンの副反応報告数
 (「予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会資料〔2017.5.15〕」より)

(青野典子)

©Aono Noriko 2017